

# 婦人文藝

全一〇卷・別冊一

復刻版

不二出版



松田解子



神近市子



大田洋子



円地文子



深尾須磨子



林芙美子



(左から) 林芙美子・佐多穠子・吉屋信子・宇野千代

近代日本女性史に屹立する「社会文芸総合雑誌」 神近市子 編  
一九三四(昭和九年)〜一九三七(昭和十二年)



# 復刻の辞

一九一一年の『青鞥』創刊以来、女性による文芸雑誌はいくつか数えられるが、『婦人文芸』もまた『女人芸術』廃刊後の昭和一〇年代前半、女性のための自己表現の場として注目される雑誌である。本誌の主宰者・神近市子は、もともと文学を志した人で、一九一四年、尾竹一枝らと雑誌『番紅花』を刊行したこともあった。また、ジャーナリスト・評論家としてすぐれた女性解放思想家であっただけに、本誌は単なる女性文芸雑誌にとどまらず、フェミニズムをはっきりと意識し、また社会と文学、社会と個人・女性の問題を視点に据えた雑誌となっている。「モダーン恋愛特集号」「女流芸術家と実生活」「職業婦人問題特集号」などの特集号の内容にそれははっきりと表れている。昭和文化史研究に新しい示唆を与える重要資料として復刻し、新たに解説・総目次・索引を付す。

## 推薦の辞 (順不同)

### 蘇る女たちの情熱

佐多 稲子

平塚らいてうさんの『青鞥』にはじまる近代女性解放の歴史は、川幅は狭くとも、とうとうと水をたたえ、勢い良く流れる溪流にも似ていて、それは現在へと広く豊かな流れとしてつながっていると、私は思う。

『婦人文芸』もその流れの上に確かに存在する雑誌である。長谷川時雨さんが主宰されていた『女人芸術』の廃刊を惜しみ、新しい文芸雑誌を創刊して、そこに自己の発露を求めた神近市子さんたちの思いに私も全く同感である。

いま、『婦人文芸』のページを繰ってみると、当時、自己確立と自己探求の道を求めて一生懸命だった女のひとたちの情熱が、時代を超えて伝わってくる。そこには今日に生きる人たちに重なる思いが渦巻いているはずである。

『婦人文芸』の復刻が女の歴史の中の一時点としての現在を映しだす鏡となることを期待している。(さた・いねこ 作家)

### フェミニズムの源流をたどる

渡辺 澄子

『青鞥』を幹または親根として、そこから『番紅花』『女人芸術』『火の鳥』『婦人文芸』などの生まれた、明治末年から昭和初年にかけては、女性が自己意識に目覚め、自由と解放を希求して表現行動した、まさに女性進出の時代だった。

ここに集った女性たちは、それぞれの形で抑圧され閉ざされていた女性の自我を主張し、その自我の充足を求めて闘ってきた。それは一見楽しげでありながら血みどろの闘いだったといえるだろう。

この度復刻刊行されることになった『婦人文芸』は、『女人芸術』『火の鳥』がフェミニズム進行下の弾圧のなかで相次いで事切れた、そのあとの厳しい時代にあえて創刊された、フェミニズムの視点を当初から明確にもった、思想性の高い雑誌である。

かつて青鞥社員であった神近市子中心の、前記雑誌のいない手を網羅した執筆陣に、『青鞥』から次第に幅の広がっていった流れを確認できるが、それは文芸誌から社会文芸総合誌への移行の道程にも示されていて興味深い。

いまは『女性の時代』といわれている。しかしそれは皮層にすぎない。真のフェミニズムを根づかせたい私は、先輩たちの闘いを見据えたい。実見困難だったこの雑誌を揃って手にできる嬉しさを私の心はずんでいいる。

(わたなべ・すみこ 大東文化大学教授)

### 「暗い谷間」の時代の蕾

保昌 正夫

『婦人文芸』が出ていた昭和九年から一二年にかけては『婦人画報』『婦人倶楽部』『婦人公論』『婦人の国』『婦人之友』といった婦人雑誌があった

が、このなかで『婦人文芸』は、いわば目こぼしされてきたものである(一昨年、篠崎富男によって細目が編まれることで、ようやくその全容が伝えられたのであった)。

昭和九年というと、文壇では「文芸復興」が唱和されていた時期にあたるが、この「文芸復興」には両面があって、『婦人文芸』はむしろそれを批判的に受けとめて出発した雑誌であろう。主宰者が神近市子であったところも見どころである。



## 「暗い谷間」の時代の蕾

### 保昌 正夫

# 行方不明の處女作

中條 百合子

活字となつて雑誌に發表された處女作の前に、志れることの出来ないもう一つの小説がある。私は小學校の二二年の頃から、うちにあつた少

母が讀書好きで表紙の國民文庫が、作文を熱心に讀み、物語、方丈記、近



女性の自我を主張し、その自我の充足を求めて闘ってきた。それは一見楽しげでありながら血みどろの闘いだっただといえるだろう。

この度復刻刊行されることになった『婦人文芸』は、『女人芸術』『火の鳥』がファシズム進行下の弾圧のなかで相次いで事切れた、そのあとの厳しい時代にあえて創刊された、フェミニズムの視点を当初から明確にもった、思想性の高い雑誌である。

かつて青鞥社員であった神近市子中心の、前記雑誌の不在の手を網羅した執筆陣に、『青鞥』から次第に幅の広がっていった流れを確認できるが、それは文芸誌から社会文芸総合誌への移行の道程にも示されていて興味深い。

いまは『女性の時代』といわれている。しかしそれは皮層にすぎない。真のフェミニズムを根づかせたい私は、先輩たちの闘いを見据えたい。実見困難だったこの雑誌を揃って手にできる嬉しさを私の心はずんずんしている。

(わたなべ・すみこ 大東文化大学教授)

## 「暗い谷間」の時代の蕾 保昌 正夫

『婦人文芸』が出ていた昭和九年から一二年にかけては『婦人画報』『婦人倶楽部』『婦人公論』『婦人の国』『婦人之友』といった婦人雑誌があったが、このなかで『婦人文芸』は、いわば目こぼしされてきたものである(一昨年、篠崎富男によって細目が編まれることで、ようやくその全容が伝えられたのであった)。

昭和九年という、文壇では「文芸復興」が唱和されていた時期にあたるが、この「文芸復興」には両面があつて、『婦人文芸』はむしろそれを批判的に受けとめて出発した雑誌であろう。主宰者が神近市子であつたところも見どころである。

婦人(＝女性)の立場からの「暗い谷間」にさしかかる時代に対する姿勢が随処に看取れる。宮本百合子のいった「冬を越す蕾」の一枝とも見られるのである。『婦人文芸』と名のりながら、「社会文芸総合雑誌」としての性格を多分に備えている。執筆者も(男性をも加えて)きわめて多層である。個人全集等に漏れている仕事も少なからず見あたる。

この雑誌は駒場の日本近代文学館にも、目下のところ、全体の三分の一にも足らぬ号数しか備わっていない。このところ女性運動関係の資料の発掘に力を入れている不二出版から、『婦人文芸』の復刻版が編まれるとのこと、注目したい。(ほししょう・まさお 相模女子大学教授)

## 近代を生き抜いた彼女たちの真摯な姿をみる 田中 和子

神近市子というひとりの個性を語る時、私は彼女の生きた時代と、彼女の横に連なる幾千幾万の彼女たちが歩んだ人生におもいを馳せずにはいられない。

長崎に生まれ、女子英学塾に入学した市子は、文学と女性問題に傾倒して青鞥社に加盟、卒業後、教職を経て新聞記者となり、戦後は衆議院議員として、文字どおり女性解放に一生を捧げた。

神近市子の魅力は、強靱な意志と激しい情熱そして聡明さにあるといえようが、己れにあくまで忠実であろうとするその愚直なまでの誠実さに、とりわけ私は心魅かれる。当時としては稀に見るエリートであつたにもかかわらず、彼女は、決してスマートな生き方を選択せず、むしろ自分のおもいに従つて、あえて困難な状況に踏み込んでいった。それは同時代の多くの目覚めた彼女たちの選んだ道とも重なりあう。

生涯最大の試練となつた「日蔭茶屋事件」は、自由恋愛を標榜する反体制の男たちも畢竟そこから自由ではありえなかつた家父長制の呪縛に抗い、自らの女性解放思想を生ききろうと努めた市子が、行き着かざるをえなかつた蹉跎であつた。

『婦人文芸』は、神近市子が遺した唯一の主宰雑誌である。そこには、若き日に文学を志した彼女がめざし夢見たものが花ひらいている。いまでは市民権を得た「フェミニズム」という言葉も、ここではういういしい響きを放ち、現在を生きる私たちの源流を見る思いがする。改めて女性解放の歴史を検証するよすがとしたい。

(たなか・かずこ 国学院大学助教授)

★ 一九三六年の婦人年報 ★  
座談會  
出席者  
平林たい子  
窪川いね子  
松岡秀子  
片岡鉄子  
岡邦子  
村岡兵



### 藝術家としてのスタートの思出

## 行方不明の處女作

中條百合子

活字となつて雑誌に發表された處女作の前に、志れることの出来ないもう一つの小説がある。

私は小學校の一二年の頃から、うちにあつた小さいオルガンを弾きおぼへ、五年生時分には、自分の好きなのは音楽なのであらうと思つてゐた。ところが、段々文字がよめ、文章を書くことに興味を覚えたから、音楽もすきたが文學はもつと身近いものとして感じられるやうになつて來た。そして、恐らくは誰でも一度経験するであらう濫讀、濫寫、模倣の時代がはじまつた。

母が讀書好きで、表紙の國民文庫が、作文を熱心に讀み物語、方丈記、近だ。與謝野晶子さ、確にはいつ頃の、私は其を眞似て、表紙をつけ、綴り小學校六年の時來てふだんは



### 追憶

## 素木しげお

作家流女の憶追



青鞜

せいとう

全五二冊



一九二一(明治四四)年〜一九二六年  
全五二冊・別冊一  
A5判・並製・総八、八二四ページ  
別冊―解説(井手文子)・総目次・索引  
推薦―井手文子・澤地久枝・瀬戸内晴美・  
中山和子  
揃定価 一一〇、〇〇〇円

平塚らいてうが中心となって、日本で初めて発刊された、女性の手による女性のための文芸雑誌。一九二一年九月、「女流文学の発達を計り……他日女流の天才を生まむ」ことを目的に創刊された。「山の動く日來たる」と与謝野晶子が謳い、「元始女性は太陽であった」とらいてうが述べたように、『青鞜』の出現は、女性の近代的自我の目覚めを象徴し、近代日本の女性解放の暁を告げるものとなった。女性史研究の原典である本誌を原本どおりに復刻。

番紅花

さくらん

全六号

一九二四(大正三)年三月〜八月  
全六号・別冊一  
菊判・総一、四〇八ページ  
別冊―解説(渡辺澄子)・総目次・索引  
推薦―尾形明子・駒尺喜美・瀬沼茂樹・丸岡秀子  
揃定価 特装版(快入り) 三五、〇〇〇円  
合本版(全二巻) 一八、〇〇〇円



青鞜社の話題の中心にいつもあった紅吉尾竹一枝が、神近市子・小林哥津らとともに創刊した文芸雑誌。一枝の豊かな感覚・才能を反映して、誌面は小説・詩・戯曲・美術写真・舞踏写真など多彩な表情を見せて興味深い。『青鞜』と表裏した独特の「女流総合芸術雑誌」として、また大正期文学の女性の可能性を豊富に秘めた雑誌として貴重である。

叢書 青鞜の女たち 全一〇巻

全二〇巻(全二冊)・各巻解説付き  
推薦―熊坂敦子・佐多稲子・丸岡秀子他  
揃定価 一一〇、〇〇〇円

■収録図書 ①平塚らいてう「凹窓より」  
②伊藤野枝「乞食の名譽」③与謝野晶子「激動の中を行く」④岩野清「愛の争闘」⑤生田花世「燃ゆる頭」⑥荒木郁「火の娘」⑦青鞜社同人「青鞜小説集」⑧神近市子「引かれものの唄」⑨長谷川時雨「美人伝」⑩水野仙子「水野仙子集」⑪山川菊栄「婦人問題と婦人運動」⑫上野葉子「葉子全集」⑬山田わか「女・人・母」⑭田村俊子「木乃伊の口紅」⑮西川文子「婦人解放論」⑯中平文子「女のくせに」⑰松井須磨子「牡丹刷毛」⑱三宅やす子「未亡人論」⑳鷹野つぎ「悲しき配分」



- 一九〇〇年 『婦女新聞』創刊
- (明治三三)
- 一九〇三年 愛国婦人会設立
- 一九〇五年 治安警察法第五条改正の請願運動おこる
- 『女子文壇』創刊
- 一九〇七年 『世界婦人』創刊
- 一九一一年 『青鞜』創刊
- 一九一三年 「新しい女」論議おこる
- (大正二年) 『新眞婦人』創刊
- 一九一四年 『番紅花』創刊
- 一九一五年 貞操論争おこる
- 一九一六年 葉山日蔭茶屋事件
- 『婦人公論』創刊
- 一九一七年 神近市子、入獄
- 母性保護論争おこる
- 一九一八年 神近市子、出獄
- 一九一九年 新婦人協会設立・同機関誌『女性同盟』創刊
- 一九二〇年 赤瀬会結成
- 一九二一年 『女性改造』創刊
- 一九二二年 関東大震災、甘粕事件
- 一九二七年 『婦選』創刊
- (昭和二)
- 一九二八年 『女人芸術』創刊
- 『火の鳥』創刊
- 一九二九年 無産婦人同盟結成
- 一九三〇年 『婦人戦線』創刊
- 一九三一年 大日本連合婦人会発会
- 一九三二年 大日本国防婦人会発会
- 一九三三年 『輝夕』創刊
- 一九三四年 『婦人文芸』創刊
- 一九三七年 愛国婦人会・大日本国防婦人会、軍事扶助中央委員会に参加し、後援活動強化
- 『婦人文芸』廃刊
- 一九四五年 敗戦

復刻版『婦人文芸』概要

概要	1934(昭和9)年7月〜1937(昭和12)年8月 全10巻(全37冊を合本製本)・別冊1 菊判/上製/総6,400ページ		
別冊	解説・総目次・索引 <別冊のみ分売可・定価 1,000円>		
解説	黒澤亜里子 (法政大学大学院博士課程)		
推薦	佐多 稲子 田中 和子 保昌 正夫 渡辺 澄子 (五十音順)		
配本 <全2回配本>	第1回 1~5巻	75,000円	1987年4月刊行済
	第2回 6~10巻+別冊	75,000円	1987年7月刊行済
揃定価	150,000円 (分売不可)		

復刻版『女人芸術』——予約募集のご案内

長谷川時雨主宰の文芸雑誌。多くの作家を輩出した近代女流文学の金字塔!

刊行期日	1987年10月1日
揃 価	予約特価 135,000円 (定価150,000円) (1987年10月末日まで申込の方に限る)
概 要	1928(昭和3)年7月〜1932(昭和7)年6月 全48冊・別冊1・付録1 A5判/並製/総9,400ページ
別 冊	解説・総目次・索引
付 録	本誌付録の『女人大衆』36冊
解 説	紅野敏郎 (早稲田大学教授)



不二出版

東京都文京区本郷五二一八三  
電話 〇三(八二)四四三三  
振替 〇東京六一九四〇八四